

第38号 華山会報

平成29年6月1日

公益財団法人華山会

田原市博物館名誉館長にドナルド・キーン先生



田原市では、田原市と渡辺華山先生の魅力や情報を発信していただくため、『渡辺華山』を執筆された高名な日本文学研究者であるドナルド・キーン氏に田原市博物館名誉館長就任をお引き受けいただきました。3月30日に、田原藩上屋敷があった場所にほど近い東京都千代田区都市センターホテルで田原市長から名誉館長委嘱状と盾をお渡ししました。

キーン氏は、一九二二年にアメリカ・ニューヨークで生まれました。日本文学研究者で、コロンビア大学名誉教授。日本文化・日本文学の研究に生涯を捧げ、国内外で高い評価を受けています。二〇〇二年には文化功労者、二〇〇八年には文化勲章を受章されています。二〇一一年三月の東日本大震災後、被災地の懸命に生きる人々の姿に「いまこそ私は日本人になりたい」と日本永住・日本国籍取得の決意を表明。二〇一二年三月には、日本国籍を取得され、名をキーン・ドナルド。雅号「鬼怒鳴門」を使われることもあり。二〇一三年九月二十一日、新潟県柏崎市にドナルド・キーン・センター柏崎が開館しました。

ドナルド・キーン先生と渡辺華山・田原市との関係を紹介します。二〇〇五年に『華山会報第15号』の巻頭言を寄稿いただきました。同年、華山大祭にて講演会「渡辺華山と周囲の人々」開催。二〇〇七年に、85歳で『渡辺華山』（角地幸男訳 新潮社）。英語版書名“Frog In The Well: Portraits of Japan by Watanabe Kazan, 1793-1841” New York: Columbia University Press, 2006 を出版されています。同年九月放送の新日曜美術館（Eテレ）では、大好きな画家として渡辺華山先生をあげ、「手を縛られた獄中の自分の姿」、華山自身を描いた絵を初めて見た時、そのあまりのリアリズムに度肝を抜かれ、「華山の生気みなぎる肖像画は、写実的であると同時に、人物の個性の再現なのです」華山を「無限に知りたい」と話したドナルド・キーンさんが、渡辺華山への熱い想いを語りました。

田原市博物館名誉館長としてますますのご活躍を期待しています。

目次

題字「華山会報」元華山会理事
故小澤耕一氏

P ① 田原市博物館名誉館長に
ドナルド・キーン先生

P ① 目次

P ② 金子武四郎への依頼状
と彼の人物像の紹介
別所興一

P ④ 渡辺華山『毛武遊記』⑮

P ⑧ 『四州真景の旅』②
帰路の旅程

P ⑫ 華山・史学研究会研修視察
毛武と渡辺華山〜熊谷

P ⑭ 華山の田原行（二十二）

P ⑯ 公益財団法人華山会
田原市博物館 からご案内

金子武四郎への依頼状と
彼の人物像の紹介
研究会員 別所興一

はじめに

このたび紹介する華山書簡の宛先である金子武四郎（一八一四～一八五五年）は、三河吉田（豊橋市）魚町の魚屋の家に生まれ、幼少の頃から剣術を好み、吉田藩の雇足軽として江戸へ出た。神道無念流の剣を杉山東七郎らに学び、天性の技量もあり齋藤弥九郎（江川の手代・劍豪）と肩を並べるほどの腕前に達した。華山宅に出入りして絵画や学問を学び、画号を豊水と称した。水戸藩重臣の武田耕雲斎が華山宅で武四郎を知り、勧めて江戸小石川に道場百練館を開かせた。華山が蚕社の獄で逮捕された頃には麴町の華山宅にあって藩吏への応対、家族への力添え、極秘文書の始末などを行い、その後の華山救援運動にも大いに協力した。

居中の華山はわが子の事のように喜んでたという。同十二年五月の江戸徳丸原の高島流銃陣には水戸藩士として参加という経歴の持主でもある。

天保十一年五月の武四郎宛書簡

この書簡の原本には宛名は記されていないが、「吉田兄様」などの文言から金子武四郎であることが分かる。渡辺華山（一七九三～一八四一）は、前年（一八三九）の蚕社の獄中において多数の師友・門弟らから獄中見舞いなどの多大な世話を受けた。華山は彼らに礼状を早く届けなければ、と願いながらも、体調不良や蟄居身分の規制から延引している事情を説明し、武四郎に自分の名代として返礼に出向くよう依頼している。身体が自由がままならない境遇にあった華山にとって、武四郎は軽輩の身軽さから、華山の意向を快く受けとめて献身的に働いてくれるまことに有難い存在だったことが知られる。現代語訳文と訳注は、次の通りである。

一筆申し上げます。お手紙に接して懐かしいことばかりが思い出されます。浜松では大当たり（武四郎が

剣術師範として浜松藩に採用される話か）の由、その話は吉田の兄上（魚商・金子平五郎）様がわが家に來られた際に詳しく聞きました。鈴木春山（田原藩医）からも聞きました。私も大変喜んでいました。しかし、浜松藩（老中水野忠邦の藩領）はこれまで専ら一郷一郡の所領を欲しがり、「芸」（学問・技術）の発展なんか望んではいませんでした。ですから決して油断することなく、天下第一を目ざすだけでなく、古今第一を志して精進してください。貴君はその後の道中で所々に立ち寄って、帰府したと推察します。

ニラ（伊豆華山代官の江川英龍。開明派の幕臣）は、ご機嫌よろしいでしょうか。この頃はご出府して各地を駆けまわって居られると思えます。その後、一向にようすがわからないのは、立原杏所（華山の画友。水戸藩主徳川斉昭の側近）です。彼の病状はどうなのか、とても深刻で回復が難しいのでは、と悲嘆にくれています。私に代わってお見舞ください。小林蓮堂（華山の雅友、江戸儒者か）も、その後音信がないので、これも大変心配しています。どうしているのか、お見舞いくださることを希望します。

その他本多茂一（佐藤一斎門の学友）や佐久間象山（儒学者で蘭学にも通じ、海防の急務を主張）にもお札を申し述べたいのですが、未だ果たしていません。どうぞ二人にはこれまでの恩義を忘れていない旨、お話ください。大概俊斎（蘭方医。西洋兵学にも通じる）の仲介でお世話になった秋山謙之丞様や比志島丈右衛門様には、お二人とも自筆でお礼申し上げるのが筋ですが、昨今の事情のため遠慮しました。お二人のご恩義は決して忘れない旨、俊斎からお話いただくよう、ご伝言をお願い申し上げます。

また、羽倉外記（幕府代官。伊豆七島を巡検した開明派幕臣）様の件は、俊斎からようすを聞いた上でよろしくお取り計らいください。貴兄のご判断で、県令（江川英龍）様にもお礼して下さるようお願いいたします。齋藤弥九郎先生には何事もよろしくお伝えして、十分にお礼するようお願いいたします。杉山東七郎（武四郎の剣術師匠）にも、餞別のお札を申し伝えてください。望月兎毛（蘭学研究仲間）には、貴兄からこのたびの事件の概況をお話ください。一、谷冷二郎（田原藩江戸屋敷に雇われて厚遇されていた武士）にも、

挨拶をお願いします。その他にも挨拶すべき方々はたくさんいますが、何とぞ漏れ落ちのないようお礼をお願いします。

一、この頃またしても湿瘡が再発し、ずっと床にきましたが、ようやく便所へ歩いて行けるようになった次第です。そのせいで終日ふさぎこんだり、やきもきしたりしています。

一、小南宋左衛門（華山の知人。銀座元締役）には、その後一通も礼状を届けていません。小南の家には特別にご足労いただき、厚くお礼を申し述べていただきたいと存じます。書状を届けようと思えば、できないわけではありませんでしたが、二月十六日までは警固がきびしく音信を遠慮しました。その後は病苦のためできませんでしたが。ようやく三月になっても、ご存じのようなありさまで、四月に入るとまたも病気が再発し、ずっと寝込みました。その上、取次の者が、不意に信書を開封するころとがありますので、手紙を出す相手を選ばねばならず、延引することになったのです。山口屋（華山懇意の旅人宿の主人。蛭社の獄に連座したが、釈放された）にもよ

ろしくお伝えください。私の容態は、貴君から聞きとれるよう詳しくお話ください。

一、当方は、しろきや（武四郎実母の生家である吉田の商家）、吉田の兄上様、鈴木与兵衛（吉田の味噌醸造業者。華山に俳画を学ぶ。俳号は三岳・椎乃屋）君からも、時折お見舞を受け、かたじけなく存じます。与兵衛君とは、しきりに俳諧に関する文通があります。彼も持病で寝込んでいましたが、この頃全快しました。

一、立原杏所先生に、くれぐれもよろしくお伝えください。病状を詳しくお問い合わせの上、お知らせください。

一、香玉（華山の女画弟子。上野国緑野村の代官齋藤市之進の娘。父と共に華山救援運動に奔走）様も、病気のように、本当に心配しています。病状はどのようかお尋ねください。

一、私は今もって床につき、この手紙も寝ながら書き、乱筆となりましたことをお許しください。頓首

五月四日

次に金子武四郎の人物像を示す華山書簡（天保十一年十一月二十二日

発の鈴木与兵衛宛）を紹介したい。

一昨日、殿様が田原に着城されたので、親類の者たちが登城しました。武四郎から私宛の手紙とともに、母に対して肴代として二百疋（錢二貫文）と油・元結（椿油と髪のもとどりを結ぶ紐）などを贈ってきて、その詳しいようすを聞きました。その手紙は無沙汰の弁明だけで、詳しい事情は分かりませんが、親類の者たちの話でおおよそ理解できました。

この頃の武四郎は、水戸藩の上屋敷に武田耕雲斎様と同居している由です。武四郎は田原藩の殿様から、江戸出立前にお目通りを許され、丹後袴地（袴の生地として贈った丹後産の絹織物）二反と料理代として五百疋を惠贈されたことを聞き、母はじめみんな大喜びしました。

武四郎は手紙の中で、水戸藩に出仕したことは田原藩士の私に対し面目が立たないと申してきましたが、武四郎が殿様から右のように厚遇されたことを、私は大変有難く思います。何よりも水戸藩に出仕が決まったことを、母は大喜びしました。また、このたび田原の殿様にお目通りしたことで大喜びし、しきりにお辞儀ばかりしていました。それにつけても、母が最近ずっと苦勞してきた

ことが、よくわかりました。

私が考えるところ、武四郎はもとも私心のない男で、多くの人から憎まれるような性質ではありません。俗才にもすこぶる長けていますから、世間一般の人と適当に同調することができます。他方、節義、俗に言う俠気があつて、男子としての面目を重んずる人柄ですから、正義感を持つ諸士とも同調できます。決して何も心配するような事はありません。

言わば、新しい鯛の尾ヒレ部分が、傷みかけているようなものです。鯛の本体はきわめて味がよいのです。進物の本体が腐っていれば、尾ヒレが損傷していなくても調理できません。武四郎は当今の名君（水戸藩主徳川斉昭）のご家来になるわけですから、尾ヒレ部分が損傷していてもお構いなしに違いありません。ご心配しないようにしてください。武四郎本人は、四十歳までは禁酒すると申していますが、こちらからも精々そのように勉めるよう申し伝えます。

武四郎は江戸の華山一家に献身的に奉仕していたから、武四郎の水戸藩就職は絶好の知らせだった。華山は武四郎の個性をよく見抜き、今後の活躍を期待していたようである。

渡辺華山『毛武遊記』

15

研究会員 加藤 克己

岡田氏余(予)名を昌庵等数人より聞、幸と到待なり。桐生の人、予をこゝろ見とて岡田氏に見せしめ、其声価をさだめんとす。予もとより岡田のひとつなりを知らざれども、朝川氏之門人はかれこれ知るものを多きをもて、一二知人の名をあげて聞しに皆しらず。岡田の朝川にありし時、いと久しくなりにたれば、余知りたるものハたゞ吉田氏のミなり。されどもこれハ岡田氏美濃へ浪游の時、書画の集を催したるに、到るものなくて、そこばくの金を費し、ひそかに美濃をにげさりし事あり。吉田氏能くこの事をしりて後、朝川に至り、あひ見し事もありしとぞ。

天保二年(一八三二)十月二十一日続き

岡田氏(東塙)は、私の名を昌庵ら数人から聞いて、これは幸いと思ひ、(私の宿所蔦屋へ)来て待っていた。桐生の人、私を確かめようとして岡田氏に合せて、私に対する評価を定めようとした。私はもともと岡田氏の人物像を知らなかつたけれども、朝川氏の門人はいろいろ知る人が多いので、一人二人知人の名をあげて聞いてみたが、(岡田氏は)だれも知らない。岡田氏が朝川門下にあった時はたいへん昔のことなので、私の

知っている人(で岡田氏に分かる人)は、ただ吉田氏だけである。けれどもこれは岡田氏が美濃へ流浪した時、書画の会を催したところ、参加する者がなくて、たくさんのお金を使い果たして、こつそり美濃を逃げ去ったことがある。吉田氏はよくこのことを知っていて、後に朝川の家へ行つて、会つたこともあるという。

※ 岡田氏 岡田立助。第14回(前号)参照。

※ 昌庵 奥山昌庵。桐生新町の医者。足利行きに華山を誘つた。

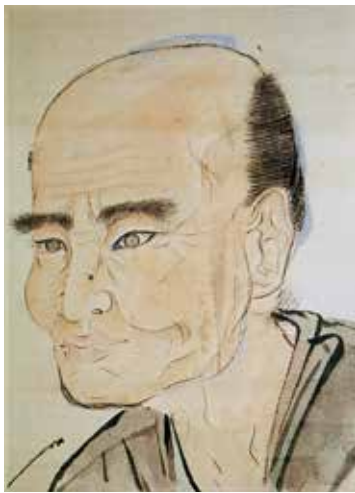
※ 声価 人や物に対する世間の評判。名声。

※ 朝川氏 朝川善庵。第14回(前号)参照。

※ 吉田氏 吉田東堂。一八〇〇〜一八五八。美濃の儒者。朝川善庵の門下。越前藩士橋本佐内、三河一宮の砥鹿神社の神職草鹿砥宣隆らが東堂から儒学を学んだ。

※ そこばく 数量の多いさま。たくさん。多く。

岡田東塙像 個人蔵



かゝる雑話より書画の事に及、長崎より西国、九州、大坂、京華雅客と交り、六法の事はいと

くはしうあげつらひて、いかで余などがましえ語らふべきにあらざれども、其其論皆一事の嗜好に落て徹透不磷の議あらず。

このような雑談から始まって、書画のことに話が及び、(岡田氏が)長崎から西国、九州、大阪、京都の風流人と交際したこと、六法のことはいへんくわしく論じ立てて、どうして私などが口をはさむ余地があるかと思われたが、その論は皆いつときの嗜好に過ぎないよう最後までしつかりつきつめて論じたものではない。

※ 京華 みやこ。京洛。

※ 雅客 風流を理解し愛好する人。風流人。

※ 六法 東洋画の制作・鑑賞のための六つの規範。南斉(四七九〜五〇二年)の謝赫(生没年未詳)が「古画品録」の序で挙げた、気韻生動・骨法用筆・応物象形・随類賦彩・経営位置・伝模移写をいう。

※ 徹透不磷の議あらず 最後までしつかりつきつめて論じたものではない。

今海内(わが国)にのこる所の法、ワづかに数種の第一狩野氏、第二洛派、第三大雅氏、第四明清様なるべし。此他光琳宗達南蘋等あれども、皆微妙として晨星のごとし。この四種の中、明清様のミ晩出にして、其人は某々、其人は某々と数たらん、皆六法の末なり。こは華人諸大家といえども、可論あり。それハ如(二)此(一)と語ひければ、岡田氏大驚き、今夕にして君あるをしり、又此大活眼あるをしりたり。さりとは我ための吉

人なるかなとて、たがひに議論喋々として終に夜明たり。

(そこで私が)「今、国内に残っている画法はわずかに数種であり、その第一は狩野派、第二は洛派、第三は池大雅の流、第四は中国の明清代の画法である。このほか、尾形光琳・俵屋宗達の流派、沈南蘋の流派などがあるけれども、どれもごくわずかで晨星のようなものである。この四種の中でただ明清様だけ遅れて世に出たもので、その人はだれだれ、その人はだれだれと数え上げ、皆六法の流れを引いている。これは中国人の諸大家であっても論ずべきであり、それはこのようなどおりである」と話してやると、岡田氏はたいへん驚き、「今夕になつてあなたのあることを知り、また、このすばらしい眼力のあることを知った。まったくあなたは私にとって何とよき人であるかな」と言つて、互いにいろいろと論じ合い、ついに夜が明けてしまった。

※ **海内** かいな 国内。

※ **狩野氏** 狩野派。狩野正信・元信が創始した絵の流派。室町時代後半から江戸時代を通じて幕府の御用絵師を務めた。

※ **洛派** 土佐派、四条派など、主として京都で活動した画系。

※ **大雅氏** 池大雅。一七二三〜一七七六。江戸時代中期の文人画家。京都の人。代表作、国宝「十便図」。

※ **明清様** 中国明清代の画法の系統。江戸時代後期に流行した。中国の風景を模した山水画

※ や花鳥画(長崎で学ぶ)を多く描いた。
光琳 尾形光琳。一六五八〜一七一六。江戸時代中期の画家・工芸意匠家。京都の人。俵屋宗達の画風を学び、装飾性に富む絵画を大成。その画風は琳派(光琳派)と呼ばれる。代表作「燕子花図屏風」「紅白梅図屏風」。

切り通しの道

かつて、桐生方面から足利の町に入る道は、小さな丘を切り通して作られていた。



※ **宗達** 俵屋宗達。生没年未詳。桃山から江戸時代初期、京都の町衆出身の画家。斬新な装飾的画法を示した。代表作「風神雷神図屏風」。

※ **南蘋** 第13回(36号)参照。

※ **晨星** 夜明けになつて、まばらに見える星。ものの少ないたとえ。

※ **晚出** 遅く出る。遅れて世にあらわれる。

※ **活眼** 物事の道理や本質をよく見分ける眼識。

※ **喋々** 口数の多いこと。しきりにしゃべること。

昌庵、蘭溪さきへ寐、梧庵は侍坐これを聴しが又寐、猶物語りつきず、又寐て話。予がひそかに御系譜の事に志あるを話、猶かの深谷、三ヶ尻のかたに知る人を得んとて頼しかバ、いとよるこび、今の時かゝる根本にこゝろざしある人もあるべし。されど其君に遇する事難かな、兄のごときハ君臣の知遇といふべし。必知る人もとめてんと約す。

昌庵と蘭溪は先に寝て、梧庵はそばに座つてこれ(二人の話)を聞いていたが、また寝てしまった。(私たち二人は)なお話がつきず、また寝て話す。私が密かに(三宅氏の)家譜の調査のことに志あることを話し、なお、かの深谷、三ヶ尻の方に(昔のことを)知っている人に会いたいと頼んだところ、(東塙は)たいへん喜んで、今の時代にこのような大本に志のある人もきつといるだろう。しかし、そのような人に出会うことは難しい。あなたに対しては臣下が主君を遇するように



厚く寓すべきである。必ず知っている人を探しましよようと約束した。

※ 寐。び。ねる。寝（シン）とは別の文字であるが、同様の意味。

※ 御系譜の事 藩主三宅氏の家譜を調査する事。

坂の蔦屋のあたり
華山たちが泊まった宿屋は、切り通しを出たすぐの位置にあった。

※ 深谷 近世は武蔵国榛沢郡深谷（深谷市）。中山道の宿駅。中世までは幡羅郡のうち。

※ 三ヶ尻 武蔵国幡羅郡（郡名の読みは、『角川日本地名大辞典・埼玉県』によれば、中世まで「はら」、近世以降「はたら」）三ヶ尻村（熊谷市三ヶ尻）。三宅氏の藩祖三宅康貞が徳川家康に従い、天正十九年（一五九二）〜慶長九年（一六〇四）、三ヶ尻を領した。三ヶ尻の調査が、華山の今回の旅行の主目的。

※ 兄 親しい先輩・友人を敬って呼ぶ語。

廿二日 晴

昌庵、蘭溪、予と岡田とかたりあかせしを驚き、且一笑して此日学校に到事をはかる。予が輩ハ皆二階にやどる。下ハそばうどんなどをひさぐ家にて、酒楼をもかねたりと聞ゆ。

二十二日 晴

昌庵、蘭溪は、私と岡田とが一夜を語り明かしたことを驚き、また軽く笑って、この日足利学校へ行くことを計画した。私の仲間はみんな二階に宿泊している。下は、そば・うどんなどを売る家であつて、料理屋も兼ねていると聞いている。

※ 一笑 ひとたび笑うこと。軽く笑うこと。

※ 学校 足利学校をさす。その始まりは、律令時代の郷学とか、鎌倉時代に足利氏が一族の教育のために創設したとかいい、『国史大辞典』には「室町時代初期に、足利一門によって、下野国足利荘に設けられた」とあるが、不明。関東管領上杉憲実が再興し、永享十一年（一

四三九）快元和尚を校長として招き、学校として整備した。武士・禅僧を対象に主に儒学書を講述。明治五年まで存続した。

祐迪より頼こせしとて、近江屋忠七（式右衛門姫の嫁せし父なり）学校の導せんとて出できたり、予に謁す。忠七祐迪のこゝろねハ予が津久井氏の因あるものにしあれば、懇にせばやと思ふなるべし。東塙等よきにはからひて出づ（客ハ岡田東塙、奥山昌庵、佐羽蘭溪、予及梧庵、此店朝飯ヲス、ムルニ大広蓋ニ飯茶碗、汁銘々添、タコノ桜煮大皿ヅツ、松魚大皿一、香モノ一皿、カスヅケ一皿、此カスヅケハ秋茄子ノ大ナルヲキリ、カスニツケシナリ）。

今尾祐迪から頼まれたといつて、近江屋忠七（式右衛門の姫の嫁ぎ先の父である）が学校の案内をしようとしてやって来て、私に会った。忠七や祐迪の心中は、私が津久井氏に縁のある者であるから、親切に世話をしようと思うのである。東塙らはいよいよ計らつてそこを出た（客は岡田東塙、奥山昌庵、佐羽蘭溪、それに私と梧庵である。この店は朝飯を勧めるのに、ふちのある大きな盆に飯茶碗、汁をそれぞれ添え、タコの桜煮大皿一つ、かつお大皿一つ、香のもの一皿、かすづけ一皿、このかすづけは秋ナスの大きいのを切つて粕につけたものである）。

※ 祐迪 今尾祐迪。第13回（36号）参照。なお、名前の読みは日本図書センター版『渡辺華山集』では「すけみち」とあるが、講談社

版『日本人名大辞典』には「ゆうてき」とある。

※ 近江屋忠七 二十一日の項(第13回、36号参照)

には「近江や忠四郎」「父なる忠助」とあり、名前が違っているが、文章の内容からして同一人物を指すであろう。

※ 式右衛門 田原藩士齋藤式右衛門。第5回(28号)参照。

※ 津久井氏 津久井祐斎。第13回(36号)参照。

※ 広蓋 ふちのある、漆塗りの大きな盆。

※ タコノ桜煮 桜煎りに同じ。タコの足を薄く輪切りにして、たれ味噌またはみりんと醤油で煮た料理。

※ 松魚 かつお。

近江屋の家を問ふ。此家蔵つくりにて小厮八九人もあるべし。家婢三四人見ゆ。表店は間口五六間もあるべし。おく深く見通たるさま、十二三間と覚ゆ。見世にきぬちりめん、その外木綿諸呉服ものありて、仕立屋もかぬ。蘭溪と予と梧庵見世に居、岡田昌庵は祐廸のがり行く。茶菓出る。

近江屋の家を訪れた。この家は土蔵造りであつて、使用人が八、九人もいるに違いない。家婢は三、四人見える。表通りの店は間口が五、六間もあるだろう。奥行きは深く見通した様子では十二三間と思われる。店には、絹、ちりめん、その外木綿、もろもろの呉服物があつて、仕立屋も兼ねている。蘭溪と私と梧庵は店におり、岡田と昌庵

は祐廸の家へ行く。茶と菓子が出た。

※ 蔵つくり 土蔵造り。蔵のようなりっぱな作り。

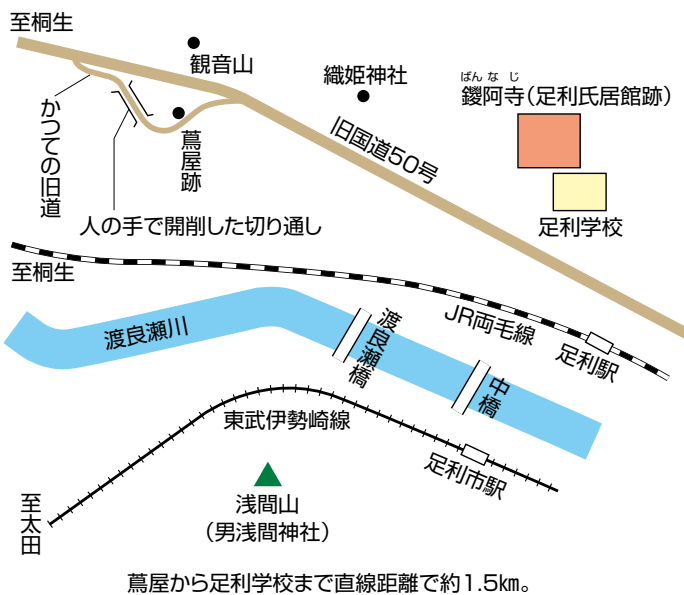
※ 小厮 使用人。小者。

※ 家婢 家で使う下働きの女。

※ 表店 表通りの店。

※ 仕立屋もかぬ 呉服の仕立屋を兼業していた。がり「かあ(処在)り」の音変化という。人を著す名詞または代名詞に付きその人のいる所へ、…のもとに、の意を表す。

足利の町略図



鳥屋から足利学校まで直線距離で約1.5km。

予及梧庵の服する麻上下、近江屋携出づ。学校預に茂木善治(御朱印有所)といえるあり。これハ津久井氏の因ある家なれば、ミやげ携え訪ひしに、江戸へ出しとて家にあらず。

私と梧庵の着用する麻上下を、近江屋が持ってきてくれた。足利学校の管理人に茂木善治(御朱印を持つている)という人がいる。この家は、津久井氏に縁のある家なので、土産を持って訪れたが、江戸へ行ったといつて家になかった。

※ 預 引き受けて面倒を見ること。またその人。担任者。管理者。留守番。

※ 茂木善治 一七九〇〜一八七五。名は久周、通称は善治、号は桜石。足利学校の代官。学問を好み、庠主(校長)を補佐して学校の運営にあたった。自製の「足利学校総絵図」や「足利学校古文書写」を残した。

※ 御朱印有所 將軍の朱印状を茂木善治が持っているということか。

追記

桐生市に華山の記念碑

桐生市の「華山と歩く会」の発案により、桐生市水道山公園に渡辺華山の桐生来訪記念の石碑が建立され、昨年十月九日、除幕式が行われました。記念碑は、主碑に「毛武游記」の一節と華山が水道山から描いた桐生の風景画、そして副碑に椿椿山筆の肖像画と略歴が書かれています。

(続)

『四州真景の旅』② 帰路の旅

研究会員 中神昌秀

一 序

四州真景の旅については、四州真景図の中に華山自身が描いた略図(旅程図)があり、その概略がわかります。このページ最下段をご覧ください。そこには江戸・銚子間の往復の旅が描かれていて、通過した宿場名が書き込まれ、その間を朱色の線で結びルートが示されています。

往路の潮来までは、四州真景図の中に文章もあるため、出版されている解説も詳しく書かれています。潮来から先は四州真景図の中に文章はありませんが、四州真景三部作の一つである刀祢游記により、銚子の大里宅に滞在したことがわかります。大里宅以外の銚子での行動についても、四州真景図の中に銚子名所巡りの真景図があり、およそわかります。

銚子から江戸へ帰るルートについては、略図の中に地名(宿場名)が書いてあるだけで文書も真景図も存在しません。そのためか、四州真景図の解説本も、帰路のルートについてはあまり書かれていない場合が多いようです。しかし、帰路も大半が当時の主要街道を利用しており、

略図の地名からどのようなルートを通ったかは判明しますので、詳しい解説は可能です。

なお、今回の文章を書くに当たっては、『富士見十三州輿地全圖之内 安房・上総・下総三國圖』人文社、『角川日本地名大辞典 12千葉県』角川書店、赤松宗旦著『利根川図誌』岩波文庫、山本鉦太郎著『房総の街道繁盛記』侖書房出版、『日本の街道96 成田街道と佐原・銚子道』講談社を参照しました。また、インターネットのデジタル地図も利用しました。読者の皆さんも、パソコンで地名を確認しながら読んで頂くと、旅の気分が味わえるのではないかと思います。

※江戸時代の地名表記について
下総国海上郡成田村などの表記は江戸時代の地名です。

二 銚子―八日市場

それでは、銚子から江戸に向け、四州真景の帰路の旅に出かけるとしましょう。銚子と大網(大網白里市)を結ぶ街道は銚子道又は銚子往還と呼ばれていました。華山は、帰路、銚子から八日市場(匝瑳市)までの区間、この街道を利用しています。この街道の位

四州真景図 旅程図



置関係を鉄道で説明すると、銚子から成東（山武市）までは、JR総武本線に、また成東から大網まではJR東金線にほぼ沿っています。

四州真景の略図では、イヌボウサキ（銚子市犬吠崎）からマツキシ（銚子市松岸町）までは、往路を戻り、マツキシ附近から往路と別れ、銚子道へ入ります。銚子駅を出発したJRもヒゲタ醤油の工場を過ぎ、松岸駅で成田線と総武本線が分岐します。マツキシの先は、芝サキ（銚子市柴崎町）、ナリタ（旭市口）、大夕（旭市二）、八日市八へと進みます。

このうちナリタ、大夕という地名は、現在の地図には見当たりません。江戸時代、ナリタは、下総国海上郡成田村でした。また、大夕は上野国安中藩板倉家領の下総国匝瑳郡太田村でした。この2つの村は、網戸村、十日市場村と明治22年に合併して旭町となり、昭和29年の市制施行により、旭市となりました。ナリタ、大夕は明治22年の合併に際し、イロハを振り成田村は口、太田村は二と表示されました。

その表示は今も残っているため、2つの村の現在地は簡単にわかります。成田村の位置については、JR旭駅の約400メートル西側に真言宗智山派成田山真福寺があり、その隣に西宮神社があります。そこが成田村になります。その西側が太田村になります。

八日市場は、旗本領で、下総国匝瑳郡八日市場村でした。現在は合併して旧郡名の匝瑳市と

いう市名になっていますが、JRの駅名は八日市場を使用しているようです。

JR 総武本線 旭駅



三 八日市場 — 多古

八日市場からは銚子道と分かれて多古街道の多古（香取郡多古町）へと向かいます。今まで太平洋沿いに進んできましたが、ここからは内陸の成田方面に向け進むことになります。

ここで、『富士見十三州輿地全圖』（以後、富士見圖と略称）をご紹介します。これは、四州真景図から十二年後の天保年間に編集された大型絵図です。最終ページ上段に全図、中央に拡大図を掲載していますのでご覧ください。

ここには、八日市場と多古を結ぶ朱色の線が描かれ、街道が存在したことがわかります。その線上には、八日市八、生尾、山桑、松山、八辺、中村、多古、加茂という地名が書かれています。街道は酒々井まで延びています。四州真景の略図には、マツ山（匝瑳市松山）、中村（香取郡多古町）、多古という地名が描かれていて、富士見圖と一致する地名があることから、このルートを通ったことがわかります。

四州真景の略図にはなく、富士見圖に書かれている地名の生尾、山桑、八辺は、匝瑳市生尾、山桑、八辺、として現在もあります。そして、生尾は県立匝瑳高校の北になります。山桑は山桑公園周辺です。

略図と富士見圖の両方に描かれている地名がマツ山と中村です。マツ山は、下総国匝瑳郡松山村でした。山桑と八辺の中間に位置しています。現在も匝瑳市松山として地名が残っています。中村も、多古町に地名が残っています。ここには、日蓮宗正東山日本寺があります。この寺には、江戸時代、中村檀林があり、最盛期には千人の学僧が在籍していました。また近くには、飯高檀林と呼ばれた日蓮宗の根本檀林もあります。現在は、講堂、鐘楼、総門等の遺構が重要文化財になっています。

四 多古 — 成田

多古から先は、四州真景の略図では、加茂（山武郡芝

山町大宮)、テラタイ(成田市寺台)、成田(成田市)という地名が見えます。酒々井と多古は多古街道という街道で結ばれています。華山は、多古から酒々井方向の加茂へ向います。加茂は上総国武射郡加茂村(元禄以前に東賀茂村と西加茂村に分村されています)です。位置は、成田国際空港の南になります。

加茂の先には多古街道と成田街道が交差する酒々井がありますが、そこには直行せず、富士見圖にもない道を辿って香取鹿島道の宿場である寺台へ向います。寺台は下総国埴生郡寺台村です。最終ページ下段に画像と解説を掲載していますので、ご覧ください。

日本図書センターの『渡辺華山集』では、寺台は「テンダイ」と書いてあり、略図でもそのようにも見えます。また印旛沼のほとりに位置するように描かれています。しかし、伊能図のような地図精度はない絵図なので、必ずしも沼との位置関係に拘る必要はないと考えます。そして四州真景の略図では「テンダイ」から行徳までは一本の線で結ばれ、「テンダイ」の次の地名は成田になっています。富士見圖を見ると、成田の隣に、寺台という宿場があります。以上を前提に考察すると「テンダイ」のように見える字は、正しくは「テラタイ」と書いてあり、寺台ではないかと考えました。

五 成田―江戸

成田と江戸を結ぶ街道は、成田街道と呼ばれる主要街道です。この街道は、もとは佐倉道と公称されていましたが、成田山新勝寺の隆盛にともない、成田道又は成田街道と呼ばれるようになったものです。

華山は、成田のひとつ手前の寺台という宿場経由で、この街道に入り、佐倉、船橋を通り、行徳河岸からは往路と同じ行程をとり、舟で日本橋小網町へ渡り、江戸半蔵門外の田原藩三宅家上屋敷へ戻りました。このルートの位置関係を鉄路で説明すると、成田から船橋までは、京成本線に沿い、西船橋から行徳までは地下鉄東西線にほぼ沿っています。

四州真景の略図には、ナリタ、サカ井、サクラ、ウス井、大ワダ、舟ハシ、行徳、江戸という地名が書かれています。ナリタは成田山新勝寺の門前町として今もにぎわっています。サカ井は、印旛郡酒々井町です。華山はサカ井と書いていますが、富士見圖、安政2年(1855)の利根川図誌ともに酒々井と書いてありますので、間違いではないでしょうか。サクラは、佐倉市です。この地を治めた歴代の藩主は、幕府の要職についた譜代大名でした。また、現在は国立歴史民俗博物館があります。ウス井は佐倉市臼井となっています。大ワダは八千代市大和田新田です。舟ハシは船橋市本町となります。行徳は、現在の市川市本行徳です。

総武本線も、佐倉あたりでは成田街道の近く

を通ります。その手前の車窓には、原野のような丘陵地が続き、江戸時代「牧」と呼ばれた放牧地の面影を見ることができます。そして、千葉からは都会の風景となり、船橋、市川を過ぎ、江戸川を渡れば、東京です。華山と共に辿った帰路の旅も終わりを告げることになります。

六 帰路の旅の謎

四州真景の旅については、往路は行徳から木下街道を木下まで徒歩で行き、そこから利根川を船で下るといふ当時の一般的なルートをとっていますが、帰路は変則的です。

帰路も寺台からは、主要な街道を利用していきます。しかし、この街道を利用するなら、銚子から香取鹿島道を通じて、成田街道へ入るといふルートが一般的ではないでしょうか。

ところが、華山は銚子から銚子道を通って八日市場まで行き、そこからは主要街道ではない道を通って成田街道に入ります。このルートを選択した意図が不明です。四州真景の旅の目的と関連があるのかもしれませんが。

七 帰路の旅の終わりに

読者の皆さん、四州真景の帰路の旅は、いかがでしたでしょうか。地名の解説が多い文章になつてしまいましたが、華山と共に旅をした気分が多少とも味わえたなら幸いです。それではまた。

『富士見十三州輿地全圖』



秋山墨仙 天保14年（1843）
153.2×174.5 / 木版

富士山を望むことができる十三の国（相模・武蔵・上総・下総・安房・上野・下野・常陸・伊豆・駿河・遠江・甲斐・信濃）を一図に収めた大型の絵図。

『富士見十三州輿地全圖』 銚子～成田 拡大図

国立国会図書館デジタルコレクションのJPEGデータを使用して作成したものです



加茂～成田 拡大図



寺台

加茂

加茂から成田(寺台)にかけては、街道の表示がありませんが、いくつかの地名が見えますので、それらを結ぶ道はあったはずで、華山はそのような道なき道を通ったと思われます。

また、寺台という宿場が成田のすぐ隣に見えます。台の字は旧字の「臺」が使用されています。

平成二十八年年度華山・史学研究会研修視察
毛武と渡辺華山〜熊谷

本年度の研修視察は、十一月二日(水)三日(木)の一泊二日、華山(三十九歳)が天保二・三(一八三一・三二)年に作成した『訪貳録』ゆかりの地を巡りました。三宅家譜編纂のため、藩主の旧領であった三ヶ尻を訪ね、地勢や風俗そして産物などを調査し、藩主に報告書としてまとめられています。陰暦ではありますが、華山が訪ねた時期も十一月でした。今回、この『訪貳録』写本や、地元で華山も訪ねた龍泉寺山門の天井絵や、埼玉県指定文化財になっている「双雁図」も出品されています。これら地元の資料が揃った「展覧会」〜桐生・足利・熊谷〜毛武と渡辺華山展」が熊谷市立熊谷図書館で開催され、田原市博物館も特別協力をさせていただき、所蔵作品から『訪貳録』を書いた天保年間前期の作品を中心に展示協力しました。展覧会を見ながら、今回の展覧会に伴う情報収集を行いながら華山が訪ねた現地の場所を確認する目的です。華山・史学研究会としては久しぶりの熊谷探訪となります。

当日豊橋駅に集合した会員は、石川洋一・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌の四名で、午前八時四十七分発のひかり号に乗り、既に乗車されてい



熊谷図書館美術展示室入口

た池戸清子会員と新幹線で合流し、東京からは上越新幹線乗換で十一時十八分に熊谷駅に到着しました。ここで、中村正子会員と合流し、合わせて六名となりました。駅北口の観光案内所で問い合わせてもらって昼食場所を探し、熊谷は小麦の生産高も県内トップで、うどんも名産とのことで、麺類のお店を紹介していただきました。

昼食後は、駅南口から近い熊谷図書館に向かい、三階美術展示室を展覧会担当学芸員の大井教寛さんに案内していただきました。無料のリーフレットも配布されています。

特に、現段階で揃えることのできる『訪貳録』写本のそれぞれの特徴や実際に華山が訪ねた地域に残る資料が出品される展覧会の情報を得ることができました。こういった話をしていて時間が過ぎるのは、早いもので、あつという間に夕方近づいて来ました。夜の食事場所の情報を仕入れ、検討しながら、今夜の宿を目指します。

宿泊先は熊谷駅から徒歩十分ほどのマロウドイン熊谷です。翌三日は、埼玉県庁から熊谷スポーツ文化公園陸上競技場がゴールとなり、市内もコースとなるニューイヤーマン駅伝の予選会となる東日本実業団対抗駅伝が開催されるよう、ホテル周辺もゴール予定の熊谷市内では、昼近くに、交通規制があるようです。正月元旦には、群馬県内で開催されるニューイヤーマン駅伝に、出場するチームが決まります。今月の二十日には、田原市でも中部北陸実業団駅伝が開催され、ニューイヤーマン駅伝連覇中のトヨタ自動車も参加します。夜は駅とホテルの間にある寿司屋で食事を取ることにします。翌日市内を案内していただく予定の地元、熊谷学の馬場國夫氏とも合流しました。

第二日目は、熊谷駅前のレンタカーを手配して機動力を利用して、熊谷市内を回ります。熊谷駅で馬場國夫氏と合流し、朝食を終えた会員をホテルで乗せ、出発しました。まず、最初の目

的地は、大麻生から荒川を隔てた江南町押切の旧持田宗右衛門宅で、華山設計と伝えられる庭を拝見します。持田家を訪ねて来た華山は、南側の屋敷正面から入って来たと考えられるので、屋敷門の配置も確認しました。持田家の庭では、馬場さんの案内とご夫妻にもお話を聞きながら皆で、記念撮影をしました。



黒田家にて



持田家の華山設計の庭の前にて

次に訪ねたのは、三ヶ尻の名主で俳人の観流亭こと黒田家です。華山が訪ねた順番とは逆ですが、次に出てくる古澤喜兵衛に紹介された俳人で、名を平蔵、号を幽鳥と言いました。観音山のふもとにある少間山龍泉寺は、渡辺華山ゆかりの地で、石碑や腰かけ石があります。



龍泉寺にて

渡辺華山の末弟、如山と弟子の高木梧庵の『訪舘録』写本、「双雁図」の所蔵先であり、また、仁王門は天保三年（一八三二）の建立で、渡辺華山が描いた松図や華山の弟子、椿椿山・斎藤香玉の天井絵もあります。

市内には、秩父鉄道の大麻生駅近くで、華山が三ヶ尻逗留の間に宿泊していた大麻生村の古澤喜兵衛の来客用の離れが現存し、間口四間通し、奥行き二間半のひさし桁が見られる松蘿園がある。大麻生駅と松蘿園の間には、周辺に比べると低い土地で、造り酒屋であった古澤家では、荒川水運を利用して酒などを運ぶため、船を着けられるよう

になっていたとの話を馬場さんからうかがいました。次に、大栄神社境内にある石積燈籠で「大麻生領主 古澤喜兵衛」とあり、天保二年に寄進したものとわがわがわかります。最後に、渡辺華山も訪ねた国宝歓喜院聖天堂の妻沼聖天山へ向かいます。駐車場に入り、歓喜院本院本堂を見てから、聖天堂に向かいます。妻沼聖天山をまつたとされる斎藤別当実盛公菊人形が迎えてくれました。平成二十三年に修理が完了して宝暦十年（一七六〇）建立当時の姿が蘇っています。斎藤実盛公の銅像も見学しました。



その後、熊谷へ来たルートと逆で東京へ出て、豊橋を経由し、無事田原へ帰着することができました。

研究会員 鈴木利昌

華山の田原行（二十二）

二月二十二日（続）

「皆胸す松間の径をたどる。蔵王権現ハ黒う繁りていと尊し。」

目的地を浦村から瀧頭へと変更した華山二行は、松の間の道を通り、蔵王権現まで来ます。「胸す松間の径」から、蔵王山の麓の道を通ったと思われまます。華山の記す蔵王権現は、現在の熊野三所権現神社です。当時は高い木々に囲まれ、あまり日の光もささない暗い所に建っており、その様子が華山には大変尊く感じられたものと思われまます。現地の「熊野三所権現由緒」の案内板には、次のようにあります。（傍線筆者）

熊野三所権現由緒

本宮 須佐男命 阿弥陀如来
 祭神 新宮 速玉男命 本地佛 薬師如来
 那智 伊弉冉命 千手観音

平安朝末期、熊野族の移住と共にその守護神である蔵王権現を山頂に、氏神である熊野権現を山腹に祭祀して、この御山を蔵王山と名づけ、

この地を熊野ゆかりの田原となしてよりこのかた、蔵王山ならびに上、下の権現は近郷近中の信仰の中心となり、三ヶ寺の神宮寺や修験、行者の堂塔坊舎が点在して、庶民の信仰や生活習俗に深いかかわりをもってまいりました。

江戸初期、山頂の蔵王権現をこの宮に合祀して蔵王宮と称して明治まで続いていましたが、明治元年の神佛判然令により蔵王権現は廃されて熊野社となり、その熊野社も昭和三十五年九月をもって巴江社に配祀されるにいたりました。

昭和五十年に蔵王山権現の森育成協議会が発足し、山頂山麓一帯にかけて住民の善意と創意と奉仕による自然と人間との調和した憩いの場、心身錬成の場として整備開発がなされました。しかしその中心をなす熊野権現跡地は荒廃したままとなっていることをなげいて、ここに有志が相計りて熊野三所権現を復元し祭祀するにいたりました。

蔵王権現の森育成協議会

熊野三所権現神社は、「権現の森」として整備されている公園の奥にあり、蔵王山自然歩道の起点となっています。八合目には、蔵王権現堂があります。



蔵王権現堂



権現の森



熊野三所権現神社

かつては、登山道として、神社裏手に山岳信仰の修行場を思わせる急峻な道がありました。その後、西側にハイキングコース、昭和四十九年に自然歩道が整備され、手軽に登れるようになりました。また、東側に県道三九九号蔵王山線、西側に市道が敷かれ、自動車でも手軽に行けるようになり、山頂は「日本夜景百選」に選ばれた夜景スポットとなっています。

「原を歩き畑を經る。猪のあれたるあとハ麦あはれになりて見苦し。こは人の胸丈に垣穂結たらんにハ此憂ハなきを、人々惰慢にてかくなりどぞ。」

蔵王権現の記述は、「黒う繁りていと尊し。」だけなので、特に立ち寄ることもなく、そのまま素通りしたものと思われれます。その後、西に向かい、現在の藤七原のあたりに出たと思われれます。そのあたりの猪により踏み荒らされ麦を見て、「あはれになりて見苦し。」と記しています。さらに、「こは人の胸丈に垣穂結たらんにハ此憂ハなきを、人々惰慢にてかくなりどぞ。」と、胸丈程度の垣根を作れば害を防げるのに、農民の怠慢からこうなつたとやるべきことを怠つたことを厳しく言及しています。

には松しかなく、大きな岩も転がっていて、畑は小石混じりとなつていたようです。ところが、田の様子は華山にとつて絶景に映つたようです。「田毎の月」とは、たくさん並んだ狭い田の一つ一つに映る月のことで、特に、長野県更級郡冠着山(姨捨山)の棚田に映る月のことを言います。「格子田」というのは、棚田のことと思われれます。当時、姨捨山の棚田に匹敵するくらい棚田が田原に見られたということでしょうか。

もつとも、華山自身、姨捨山はおろか信州を訪れたこともなく、「かの」という言葉から、何かの書物から得た知識をもとに、連想したことだと思われれます。華山の訪れた土地から考えると、華山は、それまでに棚田そのものを見たことがなかったのかもしれない。

猪への対策の記述については、二月五日に越戸を訪れた時に、「山下の畑に鳴子引こや、そこはかとなく設ふけたり。是ハ山近く猪いづるをもてかくハせしどぞ。」(本会報二十二号)とあり、対策を講じているので、それ以上の言及はしていません。かつて河合清右衛門を「こころあしきもの」(会報二十一号)と評した農民に対する考えと共通するものがあるのかもしれませんが。

「山々のすそハたゞ小松のミにて、巖かけ落ちたるもあり。此わたりの畑ハ小石多くてあしく、山田ハ沢の中より作りて里に到る。格子田といふかの田毎の月もかくにや。」

次に「きぬがさ山の麓に到る」とあるので、これも藤七原のあたりの風景と思われれます。山すそ

名月の里として古くから文学作品に取り上げられました。江戸時代には、たくさんの俳句に詠まれた題材です。松尾芭蕉も、現地で「おもかげや姥ひとりなく月の友」という句を詠んだだけでなく、「此はたる田ごとの月にくらべみん」「元日は田ごとの日こそ恋しけれ」といった句を残しています。

(続)

研究会員 柴田雅芳

公益財団法人華山会
田原市博物館 からのご案内

田原市博物館展覧会のご案内

五月二十日(土)～七月九日(日)

企画展

田原の原風景～古写真の魅力～

(企画展示室)

昭和期の古写真を中心に展示。田原の歴史とともに、渥美半島に住んでいる皆さんが忘れかけていた懐かしい記憶を掘り起こしてくれると思います。



伊良湖岬灯台

展示解説 六月四日(日) 午前十一時

講師：学芸員 山本隆大

六月十七日(土) 午前十一時

講師：学芸員 天野敏規

同時開催：渡辺華山と渡辺小華～没後130年(特別展示室)

七月十五日(土)～十二月十日(日)

特別展

近世能装束の世界 用の

美く武家貴族の美意識

(企画展示室一・二)

文武両道を極めた武家貴族の優れた美意識に裏打ちされた高い教養と精神性が結実した能装束・能面の「用の美」を紹介。能装束の復原・制作により、能楽文化に貢献されている山口能装束研究所協

力。唐織(厚板

を含む) 20点、

長絹9点、能面

30点など合計

150点を展

示。会期中、展

示替あり。

唐織 網目七宝地芙蓉藤文様 段替り

同時開催：七月十五日(土)～九月三日(日)

渡辺華山～夏を描く(特別展示室) 夏

山欲雨凶・陰文竹など展示。

同時開催：九月五日(火)～十月二二日(日)

渡辺華山名品選 特別展示室

重要文化財孔子像・渡辺巴洲像稿・日月大黒天図などを展示。

展示解説 八月六日(日)・九月二十四日(日)・十月二十九日(日) 田原市博物館 午後一時三十分～ 山口能装束研究所

能装束研究所

能装束解説 七月十五日(土)・八月二十七日(日)・九月十日(日)・十月一日(日)・十一月十二日(日)・十二月十日(日) 田原市博物館 午後一時三十分～ 山口能装束研究所



特別公演 観世流による能講座「装束付」と「羽衣」演能 十月十一日(水)

「仙助流 南玉すだれ・手妻」公演と「武家の芸能・庶民の芸能」講演(解説山口憲)十一月二十六日(日) 華山会館 午後一時三十分～

田原城跡・月見会 十月四日(水)

詳細はチラシ等でお知らせします。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展 一般 四〇〇円(三二〇円)

特別展 一般 六〇〇円(四八〇円)

企画展・特別展開催時は小・中学生無料

毎週土曜日は小中高生無料

展示替初日は無料開放します。

(一)内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(公財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館

展覧会・催し物のお知らせ

見学会に参加できます。

博物館だより・華山会報をお送りします。

華山会報 第三十八号

平成二十九年六月一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

事務局長 小川金一

〒四四一―三四二―一

愛知県田原市田原町巴江一二の二

TEL〇五三一・二二・一七〇〇

FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

吉川利明 山田哲夫

加藤克己 別所興一

石川洋一 林 哲志

中村正子 柴田雅芳

中神昌秀 池戸清子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成二十九年十一月一日